

## 【別添 解説資料】

### 栗子神社（栗子母智丘神社）の謎

#### ——母智丘神社と御祭神・豊宇気毘売神について——

#### はしがき



参考写真-1 三島通庸  
国立国会図書館  
ウェブサイトより。

三島通庸(参考写真-1)は旧薩摩藩士で、戊辰戦争(1868年(慶応4年=明治元年)干支の戊辰の年に起きた新政府側と旧幕府側の内戦)では新政府軍として参加、会津鶴ヶ城落城(明治元年11月(旧暦9月)新政府軍に降伏)を見届けた後鹿児島に帰還薩摩藩庁入りしている。当時旧各藩は、明治2年3月版籍奉還の後も明治4年7月の廃藩置県までは旧藩主(知藩事(県知事)、封建領主から明治政府の官僚になっていた)による統治が引続きおこなわれていた。三島は下級武士であったが維新の功績が認められ藩政改革のもと、薩摩藩の領地であった日向国都城(現宮崎県都城市、4万石相当。島津分家筋が統治)の地頭として(上荘内郷・下三俣郷領主、薩摩藩庁の地方官)島津分家に替わって抜擢されている(明治2年9月～、在任期間2年2ヶ月)。

都城(現庄内地区)において三島は守旧勢力の反対を押切り、道路の整備・区画整理事業・堤防の改修・新産業の創出・学校教育の充実など地域発展に尽力した。かなり以前(H6.9.1)にNHKテレビで「ライバル日本史」(シリーズ)という番組があり「鬼県令東北開発に挑む」編を見たときに、地元の都城市庄内小学校の「維新のはじめ三島氏が心尽くして世のために残せし功をしたいつつ」と云う校歌を聞いた時おどろいたものであった。100年後に至るまで三島の功績が称えられていたのである。

明治4年7月の廃藩置県後(薩摩藩消滅)三島は東京府庁に入り参事(現在の副知事相当か)になっており、明治5年2月の銀座の大火の後に市街地の不燃化を目指し銀座煉瓦街の建設事業にあたっている。三島は、同年11月には、明治政府の教部省(宗教関係を所管する官庁、神道国教化の推進)教部大丞(現在の本省局長相当か)に栄転している。三島は、後述する母智丘神社の創建に見られるように元々敬神家として知られていたと云うけれども、教部省勤務を経てますます神道(神社)への造詣を深くしていったものと思われる。この後、教務大丞兼務のまま明治7年(1874年)12月酒田県令(明治8年12月教部大丞解任、県令専任)となり明治9年8月統一山形県の初代県令(県知事)となる(明治15年1月福島県令兼務)。

(参考文献：幕内満雄『評伝三島通庸』、NHK取材班『ライバル日本史5 挑戦』等をもとに整理)。

#### 母智丘神社について

さて、前置きがかなり長くなってしまったけれども母智丘神社とその御祭神「豊受毘売神(トヨウケビメノカミ)」(神社記念碑：豊宇気姫神)について整理しておきたい。この神社は前述の通り都城市に所在しているもので、三島通庸が地頭(地方官)として在任していたときに彼の手によって創建(修復)

された神社である。

「宮崎県神道青年会」（ウェブサイト）によれば、当該箇所には往時より石岑稻荷明神と云う社があって地元民の尊崇を集めていたようである。社地は丘阜（小山）になっていて頂上には巨大な岩石（神石）が多数並んでいると云う。社地がその頂きにあることから持尾と書き、後世母智丘と改めたと云うことである。思うにこれは当該地域には古代遺跡が見られると云うことで、恐らく 1 万年以上も続いた縄文時代から続く信仰の場であったのではあるまいか。

この稻荷明神の社殿は三島が詣でたときには荒れ果てていたようで、明治 3 年 7 月に三島が修復し再興、新に神官を呼び神託を受けたところ、祭神は豊受昆売（トヨウケビメ）と言われたそうである。そこで御祭神を豊受昆売神（トヨウケビメノカミ）とし、後日大年神（オオトシノカミ、農業・穀物の神）を合祀、神社の名称を母智丘神社としたそうである

（参考写真-2）。

三島は参拝道路をも整備し道路両側に桜の木を植樹、時々自ら参拝して敬神の範を民衆に示したという。現在母智丘神社は桜の名所としても有名で多くの人が参拝に訪れていると云うことである。

### 御祭神(御神体)について

ここではその御祭神、豊受昆売神について整理しておこう。

報告書（「万世大路、山形県側と福島県側（二ツ小屋隧道の現況について）」本文引用文にあるように、

三島文書「栗子新道工事始末第 2 回記」（明治 15 年 2 月）では母智丘神社の御祭神を「受持神」として勧請（分霊）したとしている。報告書で紹介している「栗子隧道碑記」においても、その三島文書を基に起草しているので、仮称栗子母智丘神社（ほこら）建立の経緯説明の中では当然「受持神」となっているけれども、日本語訳においては「受持神」とは「保食神」（うけもちのかみ）のこととして「五穀をつかさどる神」であると、訳者がわざわざ注書きを添えている（『栗子トンネル工事誌 1226 頁』、ウェブサイト

<http://ootaki.xsrv.jp/betsuzoe-1.pdf> 「栗子隧道碑記」（25 頁）参照）。

宗社となる母智丘神社（宮崎県都城市）からの勧請（分霊）と断っているのに、その御祭神を豊受昆売神（トヨウケビメノカミ）と云う表記ではなく、しかもさらに豊受昆売神と同一神とも云われる「保食神」の表記でもなく、「受持神」と云う表記としているのはなぜなのだろうか。

御祭神が「豊受昆売神」（豊宇気姫神）であることは、肝腎の三島県令自身が一番知っていたと思われるし、記録係伊藤十郎平（「栗子新道工事始末第 2 回記」の著者）もよく分かっていたはずだ。現に、先に報告書本文で紹介した高橋由一の「栗子隧道西口ヨリ豊受姫尊神社ヲ望ム図」（参考写真-3）では、栗子母智丘神社のことを「豊受姫尊神社」と呼んでいるからには、その御祭神が「豊受昆売大神」（豊宇気姫神）であることを誰かに教えられていたはずである。



参考写真-2 母智丘神社(宮崎県都城市)三島の創建した神社は明治 33 年 7 月焼失。明治 36 年 2 月再建。旧社格県社。宮崎県神道青年会ウェブサイトより。



参考写真-3 仮称栗子母智丘神社(拝殿と奥の院(右上石造祠))「南置賜郡万世新道ノ内栗子隧道西口ヨリ豊受姫尊神社ヲ望ム図」  
 《山形県、福島県、栃木県 道路写生帖》  
 石版画手彩色明治 18 年  
 山形県立図書館蔵

ここで若干横道にそれるけれども幕末から明治にかけての洋画の先駆者高橋由一(注)と万世大路との関連について若干記しておく。高橋由一は、明治 17 年 8 月から同 11 月まで足掛け 4 ヶ月に及ぶ東北写生旅行をおこなっている。これは当時栃木県令 (M16. 10. 30~M18. 1. 22、M17. 12. 26 まで福島県令兼務、M17. 11. 21 から内務省土木局長兼務) であった三島通庸からの依頼により、三島の実施した土木工事などを石版画で記録するために栃木県・福島県・山形県を旅行したもので、三島の記録係で福島県職員であった伊藤十郎平(三島文書「栗子山隧道工事始末記」等の著者、執筆時山形県職員)が同行したという。栗子隧道には明治 17 年 9 月 9 日に訪れ写生してその日は

隧道前の松島屋に宿泊している。

(注) 高橋由一 (文政 11 年 (1828 年) 2 月~明治 27 年 (1894 年) 7 月 享年 67) は洋画の先駆者で大きな足跡を残している。作品の「花魁」「鮭」は重要文化財。

この写生の成果は『三島県令道路改修記念画帖』(山形大学附属博物館蔵) または同じ内容の『山形県、福島県、栃木県道路写生帖』(山形県立図書館蔵) として明治 18 年 11 月に各県毎にまとめられた 3 冊の画帖となっている。本稿で引用紹介した栗子隧道西口の図(参考写真-3)は、後者の山形県立図書館蔵(デジタルライブラリー、利用自由)のもので山形県分 55 枚が公開されている(表紙、跋(あとがき)なし)。また、福島県立図書館(デジタルライブラリー)においては福島県分 53 枚が公開されている(利用には許可が必要)。この福島県分には、会津三方道路などを含むが万世大路(中野新道) 関連は皆無である(刈安新道分栗子隧道東口図を除く)。三島は自ら実施した事業のみを描かせたもので、中野新道と呼ばれていた福島県側万世大路は時の福島県令山吉盛典の手になるものであった。万世大路福島県側に高橋由一の絵が 1 枚も無いのは誠に残念なことである。これは、菊地新学による「写真帖」にも云えることで、山形県側万世大路には明治開通時の貴重な写真が残されているが、福島県側についてはほとんどなく、これまた誠に残念なことと言わざるを得ない。山形大学附属博物館分のものでは 3 県分が公開されているが利用はできない。『工事誌』に掲載されている(モノクロ) 6 枚の高橋由一の石版画(写真)は米沢市長の提供となっていて、同書には『山形県、福島県、栃木県道路写生帖』のうち山形県分におさめられている旧仙台藩の儒学者岡千仞の跋(あとがき)も掲載されている。同書では山形県立図書館に言及していることから同館所蔵の『山形県、福島県、栃木県道路写生帖』から 6 枚が複写されたものと思われる。

なお、上記の高橋由一の東北写生旅行は 2 回目のものである。第 1 回目は三島が山形県令時代の明治 14 年 8 月におこなわれている。三島県令の招きによるもので県内の自身の実績を記録させようとしたもののようで、ほぼ完成した栗子隧道には同年 8 月 5 日に訪れ現場に宿泊している。この時の視察を基に栗子隧道の東西両口の絵が描かれ、併せて上杉鷹山公、大久保利通公の有名な肖像画も描かれている(いずれもカンヴァス油彩、石版画でない)。これらの絵画は、2 ヶ月後の明治 14 年 (1881 年) 10 月 3 日(栗子新道開通式)、明治天皇が御小休された隧道前(西口米沢側)の行在所(参考写真-4)の玉座に陳列され



参考写真-4 「南置賜郡栗子隧道 西口(米沢側)。坑口(奥)と行在所(手前)が見える(「菊地新学山形県写真帖」明治14年)山形県立図書館蔵

て、そのうちの「栗子西口ノ圖」は明治天皇に献上され直ちにお持ち帰りになったと云う(三島文書197頁)。本図は、『鑿道八景及栗子山隧道図修理報告書』(西那須野町)に掲載されている(宮内庁蔵)。

高橋由一は開通式にも出席しているようだ。また三島県令は、写真撮影についても当時の写真家菊地新学に依頼しており前出写真の通り貴重な記録となっている。

(参考文献:『没後100年高橋由一展図録』1994年、

『東北の道路今昔』、福島県立図書館・山形県立図書館デジタルライブラリー解説等)

ということで前置きが長くなったけれども、高橋由一の「栗子隧道西口ノ圖」(参考写真-3)は伊藤十郎平の案内のもとに描かれたようで、前回来たときには多分まだ建立されていなかったであろう仮称栗子母智丘神社の名称(或いは御祭神名)について伊藤十郎平から説明を受けて絵画タイトル(説明文)に今回「豊受姫尊神社」と記載したものと思われる。

豊受毘売神とようけびめのかみに話を戻す。前述しているように、当時の都城の地頭(薩摩藩庁から任命された地方官)であった三島通庸が母智丘神社創建時招請した神官に御神託(神仏のおつげ)があつて御祭神としてお祀りすることとなったのが豊受毘売神であることは前記している。従つて、どこかの神社から勧請(分霊)されたものではなくそれなりに由緒正しい縁起があつたと云えるであろう。御神徳として五穀成就・諸病息滅・商売繁盛・子宝・安産・縁結えんむすび・家畜保護はんしよく・繁殖(繁殖)であるという(宮崎県神道青年会ウェブサイト)。また同神社の「鳥居社務所改修記念碑」に刻されている「母智丘神社の沿革」によれば御祭神(御神体)は「豊宇気姫神」となっている(「母智丘神社一写真 by 南陽彰悟」ウェブサイト)。御祭神(御神体)の名称及び表記は幾通りもあるようで、豊受毘売神・豊宇気姫神また高橋由一の石版画タイトル(参考写真-3)では豊受姫尊神となつており、後述の古事記では「豊宇気毘賣神」(以下「豊宇気毘売神」と表記)となっている。これらはみな同一神であろう。以下、紛らわしいので母智丘神社(栗子母智丘神社)の御祭神(御神体)は**豊宇気毘売神(トヨウケビメノカミ)**と称することとする。

さて、その豊宇気毘売神(トヨウケビメノカミ)とはいかなる神様であろうか。この神様は、古事記の中に登場する。古事記とはご承知の通り、天武天皇(第40代、在位673年(天武天皇元年)~686年(朱鳥元年)の命により稗田阿礼ひえだ あれが暗記していた天皇家などの歴史を太安万侶おおの やすまろが筆録編修して和銅5年(712年)正月に時の女帝元明天皇(第43代、在位707年(慶雲4年)~715年(靈龜元年))に撰上(献上)した現存する日本最古の歴史書のことである。古事記は、上巻・中巻・下巻の3巻から構成されていて、神話の時代から推古天皇(第33代、在位592年(推古天皇元年)~628年(同36年))まで記述されている。豊宇気毘売神(トヨウケビメノカミ)は、その神話時代の上巻の中に記述されている。上巻は最初に、天地開闢かいはくから天之御中主神(アメノミナカヌシノカミ)など5柱の特別の神様(天つ神)と国之常立神(クニノトコタチノカミ)や伊邪那岐神(イザナキノカミ)と伊邪那美神(イザナミノカミ)等の神代七世の神様の記述がある。上巻は続いて、伊邪那岐神(イザナキノカミ)と伊邪那美神(イザナミノカミ)による「修理固成」などの国土創生の神話が記述されている。次に両神による御子「神々の生成」の話がありその最後に和久産巢日神(ワクムスビノカミ)がお生まれになった(このあ

と伊邪那美神は黄泉国へ（亡くなったと云うこと）、ここまで 35 神お生みになったと云う。その和久産巢日神の御子として誕生されたのが女神「豊宇気毘売神」（トヨウケビメノカミ）である。しかし神様の名前だけが掲載され特にどのように活躍したのか等の説明は古事記（上巻）にはないようである。以上の古事記関連の参考図書として『日本古典文学大系 1 古事記祝詞』（岩波書店）を使用しているが、編者校注（注釈）の中でこの神様について次のように記している。

「（豊宇気毘売神の）豊は美称、宇気は食物の意で、食物を掌る女神。伊勢の外宮の祭神でもある。」  
（60 頁）

伊勢神宮は、ご承知の通り皇室のご先祖天照大御神（アマテラスオオミカミ）を御祭神とする内宮（皇大神宮）と、その天照大御神のお食事を司る御饌都神である豊受大御神を御祭神とする外宮（豊受大神宮）、その他 125 の宮社を含めて云う。すなわち上記校注は、古事記に記述された神様「豊宇気毘売神」（トヨウケビメノカミ）はその外宮の御祭神豊受大御神のことであるとしているわけである。内宮皇大神宮は垂仁天皇 26 年（第 11 代、約 2000 年前）に、外宮豊受大神宮はその約 500 年後（現在から約 1500 年前）の雄略天皇 22 年（第 21 代）にそれぞれ経緯はあるものの三重県伊勢市の現在地に鎮座している。その雄略天皇に関しては、「倭の五王（讚：第 16 代仁徳 or 第 17 代履中、珍：第 18 代反正、濟：第 19 代允恭、興：第 20 代安康、武：雄略の各天皇とされる）」の「武」に比定され、西暦 478 年宗（現在の中国）に上表文（君主宛文書）を送ったとされることから外宮の鎮座時期が 5 世紀後半であることが想定される。その外宮の御祭神豊受大御神の御遷座の経緯は次の通りであるという。その雄略天皇の御代に、天照大御神が天皇の夢に現れ「一人でいると楽しくなく食事もおいしくないで、食事を掌る神等由気大神（豊受大御神＝豊宇気毘売神のこと）を丹波国（京都）から呼び寄せてほしい」と云う趣旨のお告げがあった。雄略天皇は驚いて、夢から覚めた後等由気大神をお呼びになり現在地に立派な宮殿を建てて祭祀を始められたという。これが豊受大神宮の御遷座の由来で、衣食住、広く産業の守護神となった。外宮の御饌殿（神様の食堂）では朝と夕の二度、天照大御神を始めとした神々に食事を供える日別朝夕大御饌祭が豊受大御神の主催のもとで 1500 年間続けられているという。この伊勢神宮と云えば皇室の祖先と云うばかりでなく日本国の総氏神のような存在であり、その御祭神のひとりとして豊受大御神（豊宇気毘売神）がお祀りされていることには意義深いものを感じる。

（以上伊勢神宮ウェブサイトより整理した。）

## 受持神(保食神)とは

次に「受持神」について整理しておこう。繰り返しになるが、これは栗子母智丘神社（仮称）の御祭神についての説明の際に、当時山形県令から福島県令に転じた（M15. 1. 25～M17. 12. 26 福島県令兼務、2. 17 着任、7. 13 専任）三島と共に、福島県職員になっていた記録係の伊藤十郎平が用いている名称である（三島文書、前掲引用文参照）。宗社母智丘神社（宮崎県都城市）からの分霊（勧請）であるから、その名称を何と表現しようが御祭神は豊宇気毘売神であることには変わりはない。これは、明治 17 年 9 月 9 日に洋画家高橋由一が栗子隧道の取材に再度訪れた際に同行した伊藤十郎平が神社名を「豊受姫尊神社」と説明していると思われることから確かなことであろう。にもかかわらず文書の中（「栗子新道工事始末第 2 回記」明治 15 年 2 月、福島県 8 等属）に「受持神」を敢えて用いている理由は分からない。この「受持神」を御祭神或いは神社名としているところもあり、それがいわゆる穀物（食料）神として認識されていることも確かである。ウケは食物の意味であり、前述の栗子隧道碑記の日本語訳に添えられた注書

きとおりの「<sup>うけもちのかみ</sup>受持神」は「<sup>うけもちのかみ</sup>保食神」と同義語であろう。結論的に云えば、同じ食料・穀物を司る神「<sup>いざなぎのかみ</sup>豊宇気毘売神」の異称として「<sup>うけもちのかみ</sup>受持神」（「<sup>いざなぎのかみ</sup>保食神」）が用いられたと云うことではなからうか。

ここでやや話しがそれるが、前に紹介した古事記上巻の続きを若干記しておきたい。<sup>いざなぎのかみ</sup>伊邪那岐神（日本書紀では<sup>いざなぎのみこと</sup>伊弉諾尊）と<sup>いざなみのかみ</sup>伊邪那美神（同<sup>いざなみのみこと</sup>伊弉冉尊）による「神々の生成」がありその御子<sup>わくむすびのかみ</sup>和久産巢日神から「<sup>いざなぎのかみ</sup>豊宇気毘売神」（トヨウケビメノカミ）がご誕生になり、この女神こそ我等が<sup>いざなぎのかみ</sup>栗子母智丘神社の御祭神であり<sup>いざなぎのかみ</sup>伊勢神宮外宮の御祭神<sup>いざなぎのかみ</sup>豊受大御神となったのであった。

このあと、古事記上巻最大のハイライトとなるが、<sup>いざなぎのかみ</sup>伊邪那岐神は「<sup>いざなぎのかみ</sup>三はしらの貴き子」を得ることになる。つまり「<sup>あまてらすおみかみ</sup>天照大御神」（<sup>たかま</sup>高天の原担当、<sup>つよみのみこと</sup>皇室の祖先）、「<sup>つよみのみこと</sup>月読命」（<sup>たけはやすきのをのみこと</sup>夜の世界担当）、「<sup>たけはやすきのをのみこと</sup>建速須佐之男命」（<sup>あま</sup>海原の担当）の三貴子である。以降、「<sup>あま</sup>天の岩屋戸」（<sup>あまのいわと</sup>天岩戸）、「<sup>あま</sup>五穀の起源」（<sup>あま</sup>大蛇退治）（<sup>やまた</sup>八岐の大蛇）、「<sup>おおくにぬしのかみ</sup>大国主神」（<sup>しろさぎ</sup>因幡の素兔、<sup>ににぎのみこと</sup>国譲り）、「<sup>ににぎのみこと</sup>天孫降臨」（<sup>ににぎのみこと</sup>天孫邇邇芸命）「<sup>あま</sup>海幸彦と山幸彦」等おなじみの神話が叙述され、最後に<sup>うがふきあえずのみこと</sup>鵜葺草不合命が登場しその御子達の誕生で上巻は終わっているが、その御子達の中に後に<sup>かむやまといわれびのみこと</sup>初代神武天皇となる「<sup>かむやまといわれびのみこと</sup>神倭伊波禮毘古命」がおいでになる。

<sup>うけもちのかみ</sup>保食神（<sup>うけもちのかみ</sup>受持神）に話を戻すがこの神様の名は「古事記」には出てこないようで、「日本書紀」の中に出てくる女神である。上記神話項目で紹介した古事記の「<sup>いざなぎのかみ</sup>五穀の起源」は有名な話であろう。これは<sup>すきのをのみこと</sup>建速須佐之男命（日本書紀：<sup>すきのをのみこと</sup>素戔嗚尊）が姉の<sup>おおげつひめのかみ</sup>大宜津比売神（<sup>おおげつひめのかみ</sup>大気津比売神）を殺害してしまい、死んだ女神の身体から蚕、稲の種、粟、小豆、麦、豆が生じ<sup>かみむすびのかみ</sup>神産巢日神により全国に広められたと云う神話である。このことから<sup>おおげつひめのかみ</sup>大宜津比売神は食物を掌る神となった（前掲書校注）。このあと<sup>すきのをのみこと</sup>須佐之男命は、姉を殺害したことで<sup>あま</sup>出雲に追放され<sup>あま</sup>大蛇退治（<sup>あま</sup>八岐の大蛇）の話しに繋がっていく。

ところで、同様の筋書きの神話が「日本書紀」にも登場する。しかし、<sup>つよみのみこと</sup>須佐之男命は兄の<sup>つよみのみこと</sup>月読命（日本書紀：<sup>つよみのみこと</sup>月夜見尊）に、殺害された<sup>おおげつひめのかみ</sup>大宜津比売神は「<sup>いざなぎのかみ</sup>保食神」（<sup>いざなぎのかみ</sup>ウケモチノカミ）に置き換わっている。その殺害され方、その後五穀の神になっていることを考えると「古事記の<sup>おおげつひめのかみ</sup>大宜津比売神」と「日本書紀の<sup>いざなぎのかみ</sup>保食神」は同じと考えることもできる。しかしながら、筆者が読み解く限りでは「日本書紀の<sup>いざなぎのかみ</sup>保食神」が「古事記の<sup>おおげつひめのかみ</sup>大宜津比売神（<sup>いざなぎのかみ</sup>伊邪那岐神の御子、古事記に明記）」と同一神すなわち<sup>いざなぎのかみ</sup>伊邪那岐神（日本書紀では<sup>いざなぎのみこと</sup>伊弉諾尊）と<sup>いざなみのかみ</sup>伊邪那美神（同<sup>いざなみのみこと</sup>伊弉冉尊）の御子であるとは直接確認出来ないし、ましてや<sup>いざなぎのかみ</sup>豊宇気毘売神のこととは思えない。しかし、関連の書物（『古事記と日本の神々がわかる本』学研など）では<sup>いざなぎのかみ</sup>保食神は<sup>おおげつひめのかみ</sup>大宜津比売神の異称であり、<sup>いざなぎのかみ</sup>豊宇気毘売神と<sup>おおげつひめのかみ</sup>大宜津比売神は同一神と云うことになっている。出自を考えても、前者は<sup>いざなぎのかみ</sup>伊邪那岐神と<sup>いざなみのかみ</sup>伊邪那美神の御子の<sup>わくむすびのかみ</sup>和久産巢日神の娘であるし、後者は<sup>いざなぎのかみ</sup>伊邪那岐神と<sup>いざなみのかみ</sup>伊邪那美神の直接の御子であるから同一神とは考え難いものがある。いずれにしても、記紀（古事記と日本書紀）の神話の世界は奥深く複雑で筆者の理解の及ぶところではないようだ。

ここでは、「<sup>うけもちのかみ</sup>受持神」は「<sup>いざなぎのかみ</sup>保食神」と同義語であり、<sup>いざなぎのかみ</sup>豊宇気毘売神（<sup>いざなぎのかみ</sup>豊受姫神）や<sup>おおげつひめのかみ</sup>大宜津比売神はいずれも同じ食物の神様であり広く諸産業の守護神としてこれらはみな同一神と理解しておきたい。従って<sup>いざなぎのかみ</sup>伊藤十郎平は、<sup>うけもちのかみ</sup>受持神を<sup>いざなぎのかみ</sup>豊宇気毘売神（<sup>いざなぎのかみ</sup>豊受姫神）と同じ意味で用いたものと理解したい。

## 神社名について

なお、<sup>いざなぎのかみ</sup>母智丘神社（宮崎県都城市）を勧請（分霊）して明治期に建立された<sup>いざなぎのかみ</sup>栗子隧道西側（米沢側）の<sup>いざなぎのかみ</sup>ほくら（<sup>いざなぎのかみ</sup>栗子神社碑の前身）について、本稿では仮称「<sup>いざなぎのかみ</sup>栗子母智丘神社」（<sup>いざなぎのかみ</sup>くりこもちおじんじゃ）と仮称したけれどもこれはあながち根拠のない話しではないのである。山形県・福島県・栃木県の各県令（知事）さらに内務省土木局長（M17. 11. 21～M18. 1. 22）を歴任してきた<sup>いざなぎのかみ</sup>三島通庸警視總監（M18. 1. 22～、子

爵)は、明治21年10月23日現職で薨去した(享年54)。南置賜郡片子村苧安駅(現米沢市万世町刈安)在住の富澤寿昌(元戸長、苧安駅責任者)がこの報に接し三島の偉勲に鑑みお祀りしたいので協力して貰いたい旨の嘆願書を柴山景綱(注)あて明治22年2月26日付けで提出している(「三島ヲ祭祀シ度キ願書」)。その別紙として(趣意書的なもの)「刈安に三島通庸ノ分霊ヲ祀リ度キ旨願書」を添えている。その大意概要はほぼ次のようなものであると思われる。若干長くなるが当時の「栗子母智丘神社」の状況を伝える貴重な資料の一つであると思われる。原文(三島文書489頁)は文語体候文・旧漢字・旧かなで分かりにくいので浅学を省みず現代文(概要)にしてみたので次に紹介する(諸賢のご助言方よろしくお願ひします)。なお、柴山景綱の肩書きは請願書には記載されていないけれども、この頃は警視庁警察本署次長(二等警視)の地位にあったと思われる(『柴山景綱事歴』明治29年7月山崎忠和 国立国会図書館デジタルコレクション)。

「栗子山母智尾神社は故大久保利通公上杉鷹山公の二霊をお祀りしているものである。社殿を建ててから暫くたち腐朽してきたので行在所に遷座し現在もなおその位置にある。元の社殿はさらに朽ち果て再遷座することができず、再び造営する動きもないことから密かに心を痛めていたところであった。先年、三島公のために石碑(栗子隧道碑記のことか)を建立したけれどもその記念式典も開催しないうちに逝去されてしまった。石碑は、三島公の功績を記録するのみで、栗子の地に弔いをするものがないと云うことは大変悲しいことである。今回その訃報を聞き三島公も栗子山母智尾神社に合祀すべきと思った次第である。しかし神社は険しい山道(万世大路のこと)の奥深くの山上にあって、これからのことを考えれば苧安駅(集落内)に神社を新に建立し三君をお祀りすべきである。その節は、四時(四つの季節、つまり常時)お祀りもうしあげ、終生お仕えしたいと思う。しかしいかにせん自分は非力なため神社の再建はできず残念に思っている。しかるに今回東京青山墓地に三島公の招魂碑を建立することとなり、本郡(山形県南置賜郡)にも拠出金の照会があったがこれは当然のことである。しかし、三島公が本県(山形県)及び福島栃木両県において県令であったところに土木工事を起こされたが、この栗子の土木工事とは比ぶべくもなく、偉勲あるこの地に三島公の分霊をお祀りしないわけにはいかない。青山の建碑に比べれば刈安に神社を建設する費用は少ないものである。故にこの機会を生かし各方面に働きかけたいと望んでおりますが何分にも微力な自分なので、事情ご賢察の上関係筋へ御協議をして頂けないでしょうか。不届きなこととですが御高名なる閣下(柴山景綱)を煩わす次第であります」。(明治22年2月26日付け、柴山景綱あて(肩書・住所なし)。差出人 山形縣南置賜郡片子村苧安駅移住 富澤寿昌(印))。

この「嘆願書(趣意書)」だけではその結果どのようになったかは不明で、刈安に三島をはじめ三君を合祀した神社があるという話しは聞いていないので実際は実現しなかったのではないかと思われる。

さて、この一文だけで断定することはできないけれども、栗子隧道西口(米沢側)に設けられたほこら(神祠)について、地元では「栗子山母智尾神社」とも呼ばれていた可能性が高いと考えられる。そう呼ばれたと云うことは、その神祠の由来が母智丘神社(宮崎県都城市)にあることは地元の方にとっては周知のことであったのであろう。本稿において「栗子母智丘神社」と仮称した所以である。

ただここで不可解なのは、神祠(神社)の最初の建立場所が旧隧道西口(米沢側)南の上ではないようにこの「嘆願書(趣意書)」から読めることである。元の場所はどこなのかは「嘆願書(趣意書)」上定かでないけれども、とにかく栗子山母智尾神社が「行在所」のところに遷座(引越し)し奉ってから明治22年2月現在(嘆願書差し出し年月日)その位置は変わっていないと明記しているのである。その

「行在所」とは、文字通りの狭い意味であれば実際に建っていた建物群（明治14年10月3日の明治天皇行幸に備え新築された。**参考写真-4 参照**）、特にその2階建ての家屋を指すと思われるけれども、ここでは広く旧栗子隧道西側（米沢側）全体を指すものと解釈したい。昭和11年10月「栗子神社」碑に建て替える際に旧社殿の位置は隧道坑口（栗子神社碑）の直上南側にあったことが明示されており、すなわち「嘆願書（趣意書）」の云う遷座（引越し）先と云っている位置であろう。またその位置は、明治17年9月に高橋由一が訪れて神社を描いている所と同一箇所であることは明白である（**参考写真-3 参照**）。伊藤十郎平も最初の建立場所として「後ニ隧道西口南ノ山上ニ一ツノ神祠ヲ建立ス」（前出本文引用文参照）と述べており、神社の位置は昭和11年10月に所在を確認している場所と変わっていないはずで遷座（引越し）はなかったように思えるのである。あるいは前出の「栗子の伝説」で云っているように大きな社殿（間口15尺（約4.5m）、奥行き九尺（約2.7m））が別にあったものであろうか。いずれにしても不可解な表現で諸賢の解明を待ちたいと思う。

**（注）柴山景綱**（天保6年（1835年）11月～明治44年（1911）9月、享年77）

明治時代の元福島県伊達郡長（M16.2～M17.11）、信夫郡長（兼任M16.11～M19.4、M17.11専任）、旧薩摩藩士。三島通庸と同郷（現鹿児島市）同年生まれの幼なじみで三島の義兄（三島の妻和歌子の兄）。明治9年8月統一山形県初代県令となった三島の求めに応じたものと思われるが、当時勤務していた警視庁から明治10年7月山形県庁入りし東置賜郡長・南置賜郡長等を歴任している。その後三島の福島県令転出に伴い明治15年1月福島県庁に異動した（学務課長）。福島では郡長時代道路整備や伊達郡役所等の社会資本整備（**参考写真-5**）、文知摺石の発掘など史蹟保存に尽力したけれども強引に事業を進めたと云うことで当時の三島県令以上に評判が悪いようである。しかし、その功績は認められるべきあると思う（『福島県史第22巻人物』）。また、伊達郡役所の建設にあたっては高額の寄付（当時の月給の半分）をしており、東京転勤後にも福島小学校の増築工事に寄付をするなど篤志家として評価されてもよいだろう。柴山は三島の警視總監就任（M18.12）に伴い警視庁に復帰していたが（M19.4二等警視、のち警察本署長）、三島の薨去後（M21.10.23）は宮内省御料局（M23.7、のち伊勢の御料局度会事務所長）に転じている。晩年は、三島が山形県令時代の明治13年に開設した西那須野ヶ原開拓農場、三島村開墾事業（現栃木県那須塩原市）に尽力しこの地で生涯を終えている（参考文献前掲書『柴山景綱事歴』、「柴山翁之碑」ウェブサイト等）。

なお、少し長くなるが柴山景綱の消息を伝える明治26年2月14日付けの福島民報の所載記事（柴山景綱氏の免官）が興味深いので下記に引用しておく。

「故三島通庸氏の本県の令たるや 微々たる一巡査より拔擢せられて本県伊達郡長となりし 大果断を以て同郡役所を梁川町より桑折町に移し 遂に同県信夫郡長に榮転し 三島県令を助けて文知摺観音新道、三島氏の別邸に通ずる庭坂新道等を開鑿し 人民の怨府となりしにも拘はらず信夫橋の大石橋を架設し 寧ろ三島氏よりも専制なりしと称せられたる柴山景綱氏は 三島氏の警視總監たりし時 再び非常の拔擢を以て月俸八十円の地方郡長より警視（百五十円）に榮転し 威権全庁を傾けしも 三島氏の卒去以来は頓に失意の人となり 世に知己なきを歎ぜしが 幾もなく御料局主事に貶せられ 其れさへ長くは勤まらず 終に非職の身となり 閑散に其日を送る中 折に触れては深く福島在任の日騎虎の勢に乗じて人民を塗炭の苦境に陥らしめたる無謀の挙動を悔悟せしこともあり由なるが 本月六日何等の故にや免官となれり 今や当町民の怨恨を集めたる信夫の大石橋は永世不朽と誇りしにも似ず 無残や十年を出でずして脆くも霖雨（りんう、長雨）の為に陥落し 僅かに足元は残れる欄干に空しく県令三島通庸、大書記官村上楯朝、郡長柴山景綱造之教文字を止むるのみ（**参考写真-6①②**） 此失意の柴山氏にして之を見れば今昔の感果して如何」（『福島市史資料叢書第27輯』7頁）。

明治26年2月7日付けで宮内省（御料局）を依願免（前掲書）となって僅か1週間後の記事で、県民の関心の高さがうかがえるようだ。



**参考写真-5** 旧伊達郡役所、明治16年10月完成（三島通庸県令、柴山景綱第2代伊達郡長）。  
第5代郡長（M19・9～M22.11）は高木秀明（栗子隧道工事責任者）。国指定重要文化財（S52.6.27）H280323



参考写真一6① 2代目信夫橋(十三めがね橋)欄干親柱(擬宝珠)、明治17年～明治19年架設、明治24年6月洪水により流出。(福島市ふれあい歴史館蔵) H240822



参考写真一6② (①写真拡大)欄干親柱擬宝珠に刻された銘。  
明治18年(1885年)6月1日、三島通庸(栃木県令)、赤司欽一(福島県令)、村上楯朝(大書記官)、柴山景綱(信夫郡長)  
(福島市ふれあい歴史館蔵) H240822

## おわりに

「栗子神社」碑の謎とは則ちその出自の謎である。上記の結論として昭和11年10月に「栗子神社」碑は、明治に建立された栗子母智丘神社(仮称)が腐朽し倒壊したためその後継として建立されたものであるからその御祭神は当然栗子母智丘神社と同じである。栗子母智丘神社は、母智丘神社(宮崎県都市)を勧請(分霊)したものであり、その御祭神は当然宗社と同じで「豊宇気毘売神」(トヨウケビメノカミ)と云うことになる(受持神または保食神は同一神)。この神様は、伊勢神宮外宮におわします豊受大御神(トヨウケオオミカミ)である。そして、栗子母智丘神社建立当初に贈右大臣内務卿大久保利通公及び第9代米沢藩主上杉鷹山公を合祀、のち山形県令三島通庸公を合祀したものであり、栗子神社も豊宇気毘売神を御祭神としこの三君も合祀されていると云える。

—— 別添 解説資料 完 ——

[その2へ戻る](#)

[その1に戻る](#)